

今でも鮮明に思い出す学生時代の記憶がある。それはノーベル平和賞を受賞した故マザー・テレサが1984年に来岡された時、マザーの傍らに立ち、通訳をされていたノートルダム清心女子大の故渡辺和子元学長。後にノートルダム清心学園理事長になられたが、私の中では今でも「学長様」である。

静かに語り掛けるような口調は、まるでマザー自らが日本語を話されているかのような不思議な感覚がした。遊びほうけていた私は、その時初めて、語学の「学び」の意義を目の当たりにした。

2011年5月27日、インドネシアの支部長を出迎えるために岡山駅に行った。新幹線の待合室に入った私の目に入ってきたのは、学長様。卒業以来だった。東日本大震災の復興支援活動などと重なり、私はかなり疲れていた。何らかの救いを求めていたからか、引き寄せられるように学長様に歩み寄り、しばしAMDAでの仕事の

AMDA理事 難波 妙

一 日 一 題

凜として

話などをした。そして、手をつないで駅構内を歩いた。学長様の柔らかな手の感触を癒やしと感じながら、同時に「小さくなられたな」と時の流れを実感した。

新潟に向かわれていた学長様の新幹線の出発時刻は、インドネシアの支部長の到着予定時刻よりも1分遅かった。私は学長様をホームまでお見送りしたいと申し出た。「インドネシアの先生は何時にお着きになるの？」と聞かれ、「1分後です」と答えた。すると学長様は、「私はあなたにそのような教育はしていません」とびしやりと言われた。「きちんとホームで先生を出迎えなさい」と。なんと、この年になってもまだ教えられるとは……。仕事への甘えを反省すると同時に、このような素晴らしい師を持ったことにひたすら感謝した。学長様は決して「小さく」はなかった。偉大だった。師は、たとえ亡くなった今でも、凜として、常に向かうべき道を示してくださっている。